

「2024年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学情報学研究科博士後期課程1年 山本 貴志

①学習成果

- 今回の派遣に参加する前とした後とで、留学、大学での学習、国際理解への意欲に関して、自分にどのような変化が起きたか

- ✓ 留学

さらに長期留学への意欲がました。

- ✓ 大学での学習

再度、第二外国語である中国語の能力向上の為、語学科目を受講する計画である。

- ✓ 国際理解

私の所属研究室で博士号を取得され、現在浙江大学においては教授職となった先輩研究室の訪問ができた。その際、浙江大学との技術力、学生研究の質の差を知り、さらに競争力のある研究開発の必要性を痛感した。中国国内では、研究成果を先ず国際特許化していることが常識であり、自らの研究開発でも同様に対応しなければ、近い将来には研究が制限されうる危機感を感じた。

- ✓ 次の海外留学についてどのような関心・計画を持つようになったか

1セメスター以上の全学交流の交換留学に応募する計画である。

②海外での経験

現地大学の研究室への訪問アポイントを事前に取り、研究の意見交換ができた。京大での研究成果についても比較でき、訪問先の教授が来学期には京大への訪問したい旨を頂いたことから、今後の更なる交流が期待できる有意義な訪問になった。

このような事前に目的意識をもって、本プログラムに参加している学生もいたので、大きな刺激をうけることもできた。そうでない学生はプログラムに依存することになるので、将来の海外留学に向けた経験としては物足りないものになったかもしれない。

他方、公の場でのほぼすべての市民行動が、記録されるシステムとなった現状は、日本以上の安全都市の様相を呈していた。道路交通や公共交通機関での規則違反が極めて少なくなっていた。他方、記録媒体が及ばない場所では、喫煙が無作法行われ吸い殻のポイ捨てが散見される。

③プログラム内容

語学留学生用1セメスターの中国語授業の最初の2週間に参加する形式であった。その他は、午後から伝統的美術館やTech博物館ツアーさらに観光地巡りなどを、他大学の学生らと共に過ごすことになった。

申し分なしと言いたいところであったが、実際のところ語学研修のみでなく、ほぼ毎日午後は、団体ツアーのように、他複数の日本から来た大学生と時間共有するスケジュールが組まれており、半分以上の授業を欠席する必要があった。

現地ボランティア学生がファシリテートをしていたが、現地での責任教員が常に同行していないので、困っているところを何度も見かけた。

④進路への影響について

海外大学の研究者のキャリアについて、具体的に考えるきっかけとなるよい機会になった。